



# 伊東市立木下空太郎記念館と 太田圓三

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi

とくに意図してはいないのに、よく訪ねてしま  
う場所がある。たとえば伊豆の伊東がそれで、  
なぜかわからないが、今回で五度目ぐらいと縁があ  
る。そして、だいたい「本日入館無料」の看板がか  
かっているのが伊東市立木下空太郎記念館だ。入館  
料は一〇〇円だが、払ったためしがない。

しかも木下空太郎が如何なる人物か、来るたびに  
忘れていくから、いつも新鮮な気持ちで見学できる。  
解説文を読みながら、「そうか本名は太田正雄さん  
で、明治十八（一八八五）年に生まれた医学者か。文  
学者でもあり、詩人でもある。木下空太郎はペンネ  
ームだっけ。他にも多分野で活躍しているなあ」な  
どと再認識していくわけだが、次に来るまでにはき  
っと忘れていくだろう。多才すぎて正体が掴みきれ  
ないということもあるが、もともと記念館を訪れる  
ようになったのは空太郎ではなく、その兄がきつ  
かだったからだ。

太田圓三は空太郎より四歳年上で、弟と同じく文  
学を愛する少年だった。いや、空太郎自身が「文学  
藝術に対する愛はやはり或る遺伝的の素質と境遇と  
に原く」と述べていることから、兄をはじめとする  
家庭環境があつてこそその彼だったのだろう。

しかし、圓三少年はどういうわけか、東京帝国大

学の土木工学科に進み、鉄道技術者になる。そして  
東海道線の六郷川橋梁の設計、房総線建設工事、上  
越線建設工事などに携わり、「鉄道始まって以来の  
天才技術者」とまで称されたという。

その業績の中で、建設産業にとって重要だったの  
は工事請負契約書の改定だろう。太田は「学術上の  
知識を充分実地に利用」するには、請負業者を健全  
に育成する必要があると考えていた。そのためには、  
旧来の極端な片務契約を是正せねばならず、発注者  
都合での工期延長時の契約保証金の還付や工事代金  
の全額支払い、または請負業者の契約解除請求権を  
認めるなど、より近代的な契約関係を目指した。

さて、彼は順風満帆の技術者人生を全うするはず  
だったが、大正十二（一九二三）年の関東大震災が  
運命を全く変えた。優秀だった彼は、帝都復興院の  
土木局長に任命され、復興都市計画という慣れない  
分野に放り込まれてしまった。それでもやるべきこ  
とを迅速に把握し、それを実行したが、心血を注ぎ  
過ぎて心身ともに疲弊し、更に折あしく復興局で疑  
獄事件が発覚したことによる心労から強い神経衰弱  
に陥り、ついには自分の胸をナイフで突き刺してし  
まった。四五歳という若さだった。

人生を豊かにするはずの仕事が原因で、若くして

自死するなど本当に痛ましい。仲の良かった空太郎  
は、兄を失った悲しみを詩に残している。「苛まれた  
心があたりを見廻はす。何か外に其原因はないか、  
何か報ゆべき仇はないかと。仇があつて復讐が出来  
れば、それはたとひ破滅であらうとも、心はその為  
にうちなごむであらうのに。外に仇はなく、手の挙  
げばもない。苛まれた心がただ身を責む。春燈風冷  
く、滂沱たり、ただ涙」



伊東市立木下空太郎記念館

[交通] JR伊東駅から徒歩約10分